

# 生態人類学会ニュースレター

THE SOCIETY FOR ECOLOGICAL ANTHROPOLOGY

2000年6月1日発行

## 報告

### ザンベジ川流域バロツェ氾濫原における生業システム：生産と交易からみたロジの世界

岡本 雅博

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

#### 1. はじめに

アフリカ大陸中南部を流れるザンベジ川上流域には、8000 平方キロメートルもの面積をもつバロツェ氾濫原 (Barotse Floodplain) が形成されており、ロジと呼ばれる人々の居住域となっている。ロジは、1 人のパラマウントチーフを頂点としたきわめて中央集権度の高い王国を形成したことで知られている。

氾濫原の内部を居住域とするロジの生活・生業の特徴として、(1) ザンベジ川の氾濫のサイクルにあわせた季節的移動をベースとした生活であること、(2) 農 牧 漁をあわせもった複合的な生業形態であること、(3) 氾濫原に適応した土地利用法・農業技術をもつこと、などをあげることができる (Gluckman, M., 1941)。

かつてのロジ王国のテリトリーには、現在でも数多くのエスニック集団が混住している。ロジが氾濫原そのものを生活の場としているのに対し、他のエスニック集団の主たる居住域はバロツェ氾濫原の外部にあり、ウッドランドを中心としている。

筆者は 1998 年 12 月から 1999 年 12 月にかけて、ザンビア共和国西部州のモンゴ県、バロツェ氾濫原のほぼ中央部に位置するシムンドゥエという名のロジの村にて調査を実施した。

#### 2. 氾濫原の農業

バロツェ氾濫原の内部は平坦ではなく、起伏に富んだ地形となっている。そのため洪水期 (2 ~ 5 月) には、完全に水没してしまう場所とそうでない所に大別できる。人々は、このような地形、あるいは土壌の違いを利用し、異なる複数のタイプの耕地を開墾して、主食となるトウモロコシを中心にサツマイモ、カボチャなどの作物を自給レベルで栽培している。それぞれの耕地では、栽培作物の種類や作付け時期にも違いがみられ、1 年間に複数回の収穫が可能となっている (表 1)。

牧草の豊かな氾濫原では多くの牛が飼養されており、マウンド状の耕地であるリズルやリトンゴでは、収穫後にクラーラが設けられ牛の排泄物による地力の維持・回復がはかられている。これは 1 つの耕地全体にまんべんなく排泄物をゆき渡らせるために、クラーラを 3 日ごとに移動させるというかなりシステムティックなものである。

ムコメナ (乾季、雨季とも) では、サツマイモの茎を敷いた下に、氾濫原に自生している雑草を入れて肥料としている。またシタバは毎年冠水するため、有機質を含んだ肥

表 1. 氾濫原におけるおもな耕地の種類

耕地	地形的特質	おもな栽培作物	収穫時期
ンダミノ	村の周囲に設けられた耕地	トウモロコシ、カボチャ サツマイモ	おもに 12 ~ 4 月
シタバ	毎年、冠水する湿地につくられる耕地	トウモロコシ、カボチャ	12 ~ 1 月
リトンゴ	砂質土壌の耕地	トウモロコシ、カボチャ	4 月
リズル	冠水しにくいマウンド状の耕地	トウモロコシ、カボチャ	4 月
ムコメナ(雨季)	雨季に作付けする heap-garden	サツマイモ	6 月
ムコメナ(乾季)	乾季に作付けする heap-garden	サツマイモ	12 ~ 1 月

沃な土壌となっている。そのためこれらの耕地では、化学肥料はいっさい用いられていない。氾濫原の農業は、持続性のきわめて高い養分循環型の農耕システムといえる。しかし洪水の水位が高い場合には、収穫前に作物が水に浸かってしまい不作となることもある。

### 3. 氾濫原の内と外との交易

氾濫原の村では、牛の移牧がおこなわれている。洪水期（2～5月）になると牛群は氾濫原をはなれウッドランドに移動するのである。移動した牛群は1960年代までは同じ村の住民によって管理されていたが、現在では氾濫原の外縁部に居住する他のエスニック集団であるブンダなどの村に預託されるようになってきている。ロジの側からみれば、この預託は、牛の世話という労働からこの期間だけ解放されることを意味する。牛群を借り受けたブンダは土壌肥沃度の回復を目的として、ロジが氾濫原のリズルでおこなうのと同じように、彼らが拓いた焼畑の休閑地にクラールを作っている。そして、ブンダからロジに対しては、キャッサバやトウジンビエ、木材といった氾濫原では入手しにくい物資の贈答・販売が頻繁に認められる。氾濫原のロジとウッドランドのブンダなどとのあいだに、新たな関係が形成されている。

氾濫原では、ザンベジ川本流や村の周囲の湖あるいは小さな凹地などで、刺し網漁や籠漁などによる漁撈がさかんにおこなわれている。魚は、日常の食事における副食物として重要である。また農業が不作の場合には、不足したトウモロコシを補うために、氾濫原で獲れた魚と氾濫原の外で収穫された作物との物々交換がおこなわれている。シムドゥエ村の一世帯は、バロツェ氾濫原から東へ約150キロメートル離れたカオマ県まで乾燥させた魚を運び、キャッサバやトウモロコシと交換していた。カオマ県はソコヤと呼ばれるエスニック集団の居住地である。氾濫原では洪水の水位が高い場合には、農作物の収穫はよくないが魚は多く獲れるといわれている。またこのような年には、氾濫原外部のウッドランドでは、降水量が多く豊作に恵まれると考えられている。

### 4. まとめ

洪水による水位の変動に巧みに対応した土地利用の方法を確立し、牛をとともなう有畜農業を達成したロジの農耕様式は、氾濫原という生態環境に高度に適応しているといつてよい。しかし氾濫原の農業生産は洪水による制約を受けやすいという不安定さも合わせもっている。この不安定さを補うためにも、氾濫原外部との交易のもつ意味は重要である。牛の移牧も、自村のみで完結せず、氾濫原の外部の人々をも巻き込んだ方式へ変化しつつある。氾濫原とウッドランドという異なる生態環境を超え

て、異なるエスニック集団間の相互依存、あるいは共生ともいえるような関係がそこには認められるのである。

### 参考文献

Gluckman, M., 1941, *Economy of the Central Barotse Plain*. The Rhodes-Livingstone Papers No. 7, Manchester University Press.

## ジャガイモ商人にみられる協力・競合関係：マチャコス市のジャガイモ卸売商人を中心に

坂井紀公子

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

### 1. はじめに

ケニアの食料流通における担い手の研究では、女性商人たちが園芸作物の流通システムの全国規模での発展に大きく貢献していると指摘されている（Robertson, 1997）。また、彼女たちは資本力のある買弁商人たちで占められた商業活動分野において、小規模商業を営み、さまざまな協力関係を利用しながら経済力を身に付けてきたという。発表者の調査地においても、県外から入荷されるジャガイモは流過程に女性商人が深く関わり発展してきたことがわかった。本発表では、ケニア・マチャコス市の公設市場を事例とし、1996年から1999年の調査結果をもとにジャガイモ流通における女性商人たちの協力・競合の関係を報告した。

### 2. 公設市場のジャガイモ流通

マチャコス市の公設市場では主に青果物の売買が行われている。1995年以降、卸売と小売の区画が別々に設けられている。県外から仕入れられる青果物のなかで、ジャガイモだけは卸売の段階から女性商人によって占められている。その理由に仕入先がナイロビのみで、かつマチャコスに近接している条件があげられる。そしてこの条件はつぎの状況を生み出した。商人は仕入れに必要な諸経費を他の品物と比べ安く抑えることができ、卸売業へ参入しやすくなっている。しかし同時に、実際は卸売商人だけでなく小売商人も盛んにナイロビでジャガイモを仕入れているため、卸売商人としての販売対象者が他の品物に比べ限られるというデメリットもみられる。1999年の調査時の卸売商人から市場内の小売商人へ卸されたジャガイモは、卸売商人たちの総仕入量の約1割（15袋 / 144袋：160キロ入り）だった。逆に小売商人たちの総仕入量からみても卸売商人からの仕入れは1割にも満たない量（15袋 / 181.5袋）であった。これは、

マチャコス市内の卸売商人から小売商人への卸売販売がほとんど見られないことを示している。これら諸状況が資本をもつ商人の参入を抑制する方向へ作用し、余剰資本の少ない女性商人が入る隙間を用意したと考えられる。

### 3. 仕入れ活動

仕入れはナイロビで週2回行われる。小売商人たちが個人で仕入れするのに対して、卸売商人たちは共同で行っている。仕入れの決済以外の過程：青果卸売市場で取引相手のジャガイモ仲買人を選択、取引交渉、品物のマチャコス市への輸送までを共同で行っている。この共同仕入れの利点は、マチャコス市への荷の到着時間を短縮できる 荷の輸送費の削減が可能という2点である。

共同仕入れした荷の到着時間を個人で仕入れた場合と比べるとその差は半日にもなる。集団でジャガイモを一括購入し、運搬業者を介することなく取引相手のジャガイモ仲買人にその荷の運搬まで任せるため、取引契約成立後すぐにマチャコスへと荷が運搬される。この共同仕入れは卸売商人が扱う品種ムコリの特徴である日光に弱く日持ちしないという点に卸売商人たちが対応した結果であった。

ジャガイモ1袋あたりの輸送費は、1996年時点で個人で仕入れた場合と共同で仕入れた場合の差額は2Ksh（：ケニアシリング）だったが、1998年にはその差額が75Kshへと変わった。1996年から1997年にかけての共同仕入れは10人前後で行われ、その仕入量は60袋前後であった。しかし1998年から1999年には仕入れメンバーが約3倍に、仕入量が2.5倍へ増加した。マチャコス市のムコリを扱うジャガイモ商人たちとナイロビのムコリ仲買人たちとの力関係の変化が輸送費用の低価を可能にしていると考えられる。この共同仕入れによる輸送費の大幅削減の時期に前後して、小売商人の共同仕入れへの参加が進んだ。輸送費の大幅削減は卸売商人と小売商人の仕入れにおける協力関係が生み出した成果であるといえる。

### 4. 販売活動

1980年代後半からもっとも利益が回収できるムコリの卸売・小売販売に特化する商人集団が形成されていた。1995年に公設市場が整備されたとき、市当局によりその集団がジャガイモ卸売商人であると方向づけられ、その他のジャガイモ品種を扱う商人は小売商人であるとされてそれぞれの区画に収容された。このような背景から区画別にジャガイモの品種売り分けがみられた。しかし1998年以降その秩序は崩れてきた。卸売商人の増加に伴い、小売重視の商法や他品種の販売といった販売の多様化を積極的に行う卸売商人が出てきた。さらに小売商人

の共同仕入れへの参加が、卸売商人と互角に争える価格でムコリを販売する小売商人を増やした。こうしてさらに小売区画内のジャガイモ販売額に幅ができた。市場全体において小売商人と卸売商人の間で販売単位をめぐっての対立が、小売区画において他品種のジャガイモ商人とムコリ商人の間で顧客をめぐっての競合関係が顕在化してきている。

### 5. まとめ

ジャガイモは県外からの青果物で唯一卸売の段階から女性商人によって占められている野菜であった。仕入れ場所へのアクセスが容易である環境から派生した操業条件により、資本をもつ商人の参入が抑制され、結果としてその隙間に余剰資本の少ない女性商人が入ってきたと考えられる。またその環境は小売商人もナイロビへ行き卸売商人と同価格で仕入れることを可能にしていた。卸売商人たちはその対処策としてムコリ販売に特化し、共同仕入れを行うことで経費を押さえ競争力をつけてきた。その後資金のない小売商人に対して卸売商人は共同仕入れの道を開き、現在区画を越えた協力関係がみられる。しかし、この協力関係は卸売商人と小売商人間の販売における潜在的対立を顕在化させることになった。卸売商人の増加に伴う内部での販売の多様化が進んだことに加えて、輸送費の大幅削減の恩恵を一部の小売商人が与るようになった。そのような状況から販売シェアの伸び悩みもしくは縮小を感じた他品種を扱う小売商人たちが、市当局への卸売商人に対する販売規制を陳情するまでに至った。以上ジャガイモ流通における商人たちの協力と競合の関係を分析した。確かに女性商人たちはジャガイモ販売でさまざまな協力関係を利用しながら経済力を身に付けてきているといえる。しかしジャガイモ販売における商人の飽和状態がみられるなか、卸売商人はさらなる流通の上位部門への転向が可能なのかなど今後の調査で検討していきたい。

### 参考文献

- Robertson, Claire C. (1997). *Trouble showed the way; Women, Men, and Trade in the Nairobi Area, 1890-1990*. Indiana University Press, Bloomington.

## フィリピン・ネグロス島での小農による危険分散型の農業：東ネグロス州における土地利用と作付けの事例より

加川 真美

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

### 1. はじめに

フィリピンのネグロス島は大土地所有によるサトウキビプランテーション経営で知られ、Sugar Island の別名で呼ばれている。しかし Sugar Island という表現は、西ネグロス州や東ネグロス州の低地には妥当であるが、ネグロスの山間地には必ずしも当てはまらない。東ネグロス州は大部分が山がちで、山間地には小農による農業経営が存在している。ネグロス農業を考えるに際しプランテーションからの視点からだけでなく、小農による経営を理解する必要がある。そのため、これまであまり知られてこなかったネグロスの小農による農業について、実態把握の基本となる土地利用と作付けを中心とした事例調査を行った。

### 2. 調査地について

東ネグロス州はトウモロコシ栽培を中心とし、セブ島に出自をもつセブアノが居住する。東ネグロス州の農業ではサトウキビ、トウモロコシとココヤシが、大きな割合を占める。調査地のバレンシア町ボンボン村は、州都ドマゲッティに近いタリニス山(1903m)の中腹に位置する。4月と5月の乾期以外は、毎月一定の雨量に恵まれ熱帯湿潤気候である。ボンボン村は、低地から移住したカトリック住民によって 1870 年代に森を切り開いて作られた。世帯あたりの土地所有面積は小さくばらつきが多いが、ほとんどすべての世帯が 0.2ha 程度の屋敷地を所有している。

### 3. 危険分散型の農業

ほぼすべての世帯が自給を目的としたバナナやタロイモの畑を持ち、多様な換金作物栽培に取り組んでいる。

1)食生活： 村では3度の食事と2回の間食があり、一日最大5食が理想とされるが、実際の食事の回数は世帯の経済状態に依存する。貧しい世帯での主食は、自家で栽培したイモ・バナナ類と、挽き割りにして米と同様に調理されるモチ種のトウモロコシである。世帯の経済状態の改善につれ、主食はトウモロコシから購入されたコメへと換わるが、イモ・バナナ類は中間食として食べ続けられる。

2)自給的作物： 自給的要素の強い作物は、トウモロ

コシ、イモ・バナナ類である。イモ類(タロイモ・キャッサバ・サツマイモ・ヤマイモ)とバナナ類をあわせた総称を、セブアノ語ではサラゴン(Salagon)といい、貧しい農民のカロリー源として重要である。植え付けの他にほとんど手間がかからず、きわめて労働生産性が高い。肥料、種子、農薬を必要としないため、資本がかからない。収穫期を選ばず、植え付けの時期をずらしておけば、年間を通じて利用できる。これらの特長を併せ持つため、サラゴンは、最低限の生存を保障する作物として栽培が続けられる。

これらの自給的作物は屋敷地内か屋敷地の近くの畑で栽培され、非常に雑多な作物配置を持った混作で行うことが多い。通常、イモの中に別種のイモを植えたり、イモとバナナというサラゴンどうしを組み合わせた混作が多く見られる。バナナは料理用のサンパブロ種を中心に複数の種類を植える。また、イモの中に自給用のトウモロコシ、換金用の花卉やピーナツを植え付けたり、バナナの中にアバカや果樹が混作される。

3) 多彩な換金作物： 換金作物はココヤシを中心にアバカ、果樹、野菜、花卉を組み合わせられて栽培される。ココヤシは他の作物と高低差を利用した混作が行われており、ココヤシの副産物は重要な現金収入をもたらす。そのためココヤシを中心とした複合が基本となっている。かつては自給をかねたトウモロコシが重要な換金作物だったが、1930年代以降アバカ、ココヤシ、野菜、花卉、果樹が次々と導入された。現在では、谷へ降りる斜面や標高の高いところではアバカが、標高 700m 以下ではココヤシが、屋敷地と高標高の耕地には果樹が栽培され、ココヤシ園や果樹園などの多少開けたところに野菜や花卉が植え付けられるというモザイク状の景観を呈している。

### 4. 作付けに影響する要因

新しい換金作物の導入には、積極的に取り組む者とそうでない者がいる。村外経験のある者、多少の資本と生活のゆとりがある者、これらが新しい換金作物に積極的に取り組み、NGO や行政の農業プロジェクトに意欲的に反応する。また身近に利用できる流通ルートが存在も新しい作物の導入には重要である。

旧来の換金作物から、新しく導入された換金作物にすべて切り替わらない要因は他にもある。例えば、野菜栽培は、単位面積あたりの収益性が最も高いと思われているが、全面的な野菜栽培への転換は起こらない。野菜栽培は労働集約的であるが、ココヤシやアバカは労働投入が低くても一定の収入が見込める。すなわち野菜・花卉栽培は利益が大きい、種子代、農薬代、肥料代、労賃などの支出も増大し、病虫害の危険性も高く、リスクが

大きい。これらの理由により、野菜栽培のみに頼る世帯はなく、野菜、アバカ、ココヤシ、サラゴン、花卉などを組み合わせた複合経営が行われる。

ここから作物の多彩な選択には、短期的な利益だけでなく、経験、流通経路、労働力や経費、リスクといったさまざまな要素が絡んでいる事が分かる。

## 5. まとめ

どの世帯も家の周りに自給的なサラゴン栽培を最低限確保しつつ、換金作物栽培を展開している。ココヤシを中心にした複数の作物の組み合わせ、モザイク的な土地利用を形成している。これらから小農による農業とは、さまざまな作物を組み合わせた作付け様式による生活の保障を重視した危険分散型の農業形態であると言える。

## モンゴルのヒツジ・ヤギ放牧群の日帰り放牧の成立機構：放牧群の流動的な編成と群れ管理の技術

風戸真理

京都大学大学院人間・環境学研究所

### 1. はじめに

モンゴル国のアルハンガイ県チョロート郡バヤン・ハイルハン行政区（半径約 15km のこの領域を以下、「ハイルハン」とよぶ）に暮らすハルハ・モンゴルの人々は、季節的に遊動しながらヒツジ、ヤギ、ウシ、ヤク、ウマを飼育し、これに依存する牧畜を生業としている。筆者はそこで、1997年5月から1999年4月にかけてのべ240日間、調査を行った。

家畜のヒツジやヤギの日帰り放牧の成立機構に関しては、これを人間と家畜との相互交渉と捉える視点から次のことが明らかにされてきた。家畜の群れは、群れの編成が恒常的に保たれ、かつ毎日繰り返し牧夫の管理を受けることによって、2つの行動様式を身につけてきた。外部に対しては一線を画すような「群れの輪郭」をもち、放牧のルートに関してはこれを学習していて、牧夫にほとんど介入されなくても自律的に日帰り放牧を遂行するというものである（谷, 1976; 太田, 1995; 鹿野, 1999）。

しかし、ハイルハンでの観察によれば、ヒツジ・ヤギの放牧群は放牧中に他の群れとしばしば混ざり合い、これを分離するために多大な労働が投じられた。本研究は、先行研究とは異なる行動をとるヒツジ・ヤギの放牧群をハイルハンの人々がどのように放牧管理しているのかを、群れ管理の技術とその社会・文化的背景の分析をとおして明らかにするものである。

## 2. 結果

### (1) 放牧群の編成

現代モンゴル国の牧民社会では、原則として核家族からなる世帯が、消費および家畜所有の単位である。遊動に関しても、年間の移動回数、時期、場所は世帯ごとに決められる。ハイルハンでは1~7世帯が集まって季節的な居住集団を形成するが、その構成は数か月ごとに変化する。

一緒にキャンプする複数の世帯は、家畜の群れ管理を共同で行う。とくに、日帰り放牧の見張りの仕事を当番にして分業し、効率化をはかっている。また、教育や通院の都合上、数か月単位での家畜の預託・受託が牧民同士でよく行われる。このような、世帯単位の季節移動と家畜の預託・受託は、季節キャンプごとの放牧群の編成を数か月ごとに変化させていた。

なお、調査地の放牧群はヒツジが7~9割を占めるヒツジ・ヤギの混成群である。牧民たちはヒツジとヤギの行動・生態の差異を認知しており、とくに春の出産期の母子管理では種ごとに異なる対処を行う。しかし、秋・冬の日帰り放牧中にはヒツジとヤギは混ざり合って行動し、牧夫もこれを区別して扱うことはなかった。特定の種や個体が群れの移動の先導役を務めるということも認められなかった。

### (2) 放牧環境

調査地の地形は大小の沢筋の走る複雑な谷間をなし、密生したイネ科草原が広がり、北側斜面にはカラマツの森林が発達している。放牧は草原で行われる。季節ごとのキャンプ地には、環境の季節変化に対応して、夏にはハノイ川沿いの開けた盆地が、秋から初春には支流の沢筋が選ばれている。そして、放牧環境も季節によって異なる。夏の放牧地は見通しがよいので、牧夫はキャンプを拠点に群れを見張る。秋から春の放牧地の地形は複雑で、牧夫が一日の大半を群れに付き添って過ごす。

社会環境としては、谷沿いに数100m~数kmごとに位置する複数のキャンプが重複して草地を利用している。年間を通じて狼害と盗難の危険もある。自分の家畜が他の群れに紛れ込んで発見が遅れることは、財の喪失に直結する問題として捉えられていて、彼らは隣人に対してすら疑心暗鬼的な態度で接しながら家畜を守ろうとしている。このため、群れ同士が混交すると牧民たちはすぐさま自分の家畜を一頭残らず取り戻そうとするのである。

### (3) 群れ管理の理念と実践

1997年の秋、26歳の男性牧夫が1人で行った日帰り放牧を調査した。放牧群の構成は3世帯の保有する合計271(ヒツジ185、ヤギ86)頭からなる。

彼によると、ヒツジ・ヤギの群れは介入を受けなければ放牧ルートを離れて人間の監視の届かないところへ移動し、そこでオオカミに食べられたり泥棒に取られたりするという。そこには「頼りない家畜」観と同時に、日帰り放牧には牧夫の随伴と介入が不可欠であるという管理理念が示されている。モンゴルでは、限られた草地を限られた時間で効率よく利用し、家畜を肥育する伝統的な方法論も発達してきた（萩原, 1999）。

実際、日帰り放牧は綿密な放牧計画に沿って行われていた。牧夫の介入行動は放牧時間中に分散して生じ、出発・帰着の前後に集中しているわけではなかった。そして、群れの行動状態の持続と変化は牧夫によって制御されていた。

放牧には乗用馬が利用され、牧夫の移動速度を徒歩と比べて飛躍的に高めていた。しかし、とくに群れをまとめる目的では牧夫が下馬して群れに介入することも多かった。ヒツジ・ヤギの逃走距離は、騎乗の場合では徒歩と比べて圧倒的に短かったため、介入効率は騎乗よりも徒歩の方が高いと考えられる。

牧夫の介入の多くは物理的な強制を伴わなかったが、家畜から期待した反応を得ることができた。鹿野によれば、牧夫の介入とそれに対する家畜の反応という相互作用はその場限りの応酬ではなくてどちらもパターン化されている。介入行動の意味は家畜によってある程度すでに学習されている（鹿野, 1999:70-71）といえるのである。

### 3. 考察

ハイルハンでは群れの編成が流動的で、放牧群には群れとしての「輪郭」や「自律性」が生じにくい。これに対応して、牧民は綿密な放牧計画ときめ細やかな世話を特徴とする放牧技術を発達させてきた。この背景には次のことがある。季節移動や預託・受託の際には、世帯ごとに保有=管理されている個体群が単位となっているのに、日帰り放牧や夜の囲いの中という毎日の管理場面では、複数の世帯の家畜たちがひとつの放牧群に属するものとして行動を同調させるように圧力がかけられるということである。

一方、放牧の環境は混交の起こりやすい条件を備えており、混交が起こると過剰な反応を引き起こす社会・経済的な素地もあるといえる。つまり混交は、家畜管理の技術的な問題にとどまらず、牧畜民として生きる彼らの社会・経済的な生活の全体を立ち現れさせるようなできごとなのである。

今後、日帰り放牧を家畜個体の側から捉え直すこと共に、群れ編成の恒常性とは相容れない牧民たちの遊動のあり方の解明が課題とされる。

参考文献

太田至, 1995. 「家畜の群れ管理における『自然』と『文化』の接点」福井勝義編『講座・地球に生きる[4]』pp.193-223, 雄山閣。

鹿野一厚, 1999. 「人間と家畜の相互作用からみた日帰り放牧の成立機構 - 北ケニアの牧畜民サンプルにおけるヤギ放牧の事例から - 」日本民族学会『民族学研究』64(1), pp.58-74.

谷泰, 1976. 「牧畜文化考」『人文学報』42, pp.1-58.

萩原守, 1999. 「ト・ワンの教え - 19世紀ハルハ・モンゴルにおける遊牧生活の教訓書 - 」『国立民族学博物館研究報告別冊』20, pp.213-285.

## 北ケニアの牧畜民サンプルの身体装飾と年齢体系：サブカルチャー化するビーズと戦士

中村香子

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

### 1. はじめに

サンプルは東アフリカ・ケニア共和国の北部に住む牧畜民であるが、ビーズを用いた「伝統的」で華やかな身体装飾を行なうことで知られている。本発表では、1999年3月から9月に行った現地調査をもとに、サンプルの身体装飾を概観し、身体装飾と年齢体系の関わりを戦士（モラン）という独特の存在を軸に考察する。

### 2. サンプル社会における年齢体系とモラン

サンプル社会には年齢体系があり、男性は割礼と結婚によって、少年（割礼前）、モラン（割礼後～結婚前）、長老（結婚後）という3つの階級に分けられる。長老は政治・経済・宗教など、すべての面で社会の中心的な存在であり、モランの結婚時期を決定したり紛争の解決をするなど、モランに対して強い権力を行使している。

割礼後に男性が、およそ15歳から30歳のあいだをモランとして結婚せずに過ごすことは、男女の初婚年齢の違いを生む。つまり女性は15～16歳で結婚するのに対して、男性は30歳でやっと結婚しはじめる。これは、サンプル社会において長老が複数の妻をもつこと、すなわち一夫多妻を可能にするしかりにもなっている。

### 3. 社会的な地位と身体装飾

サンプルでは、社会的な地位が人々の行動を強く規制する。このことは彼らの身体装飾にも明白に表現される。男性は、割礼を受けてモランになる日に、初めて赤い染料で体を染めることを許され、モランになると、ほとんど装飾をしなかった少年時代とは違って変わって色とり

どりのビーズを身につけはじめ。さらに結婚して長老になると華やかなビーズのほとんどをはずし、割礼前のような地味な装いにもどる。

一方、女性の身体装飾も地位を細かく表現している。特に、未婚か、既婚かを示す装身具は数多い。たとえば、結婚した女性は *minyorit* とよばれる鎖を耳につけるが、これは夫の存在を象徴するもので未婚女性や未亡人は決してつけない。またモランの息子を持つ女性がつける *marrsanten* というビーズの耳飾りは、息子の数だけつけられ、それぞれの息子が結婚するごとにひとつずつはずされていく。

このように身体装飾は、個々人の社会的な地位を明示し、それを人々に意識化させるという機能を果たしている。

#### 4. モランが未婚女性に与えるビーズ

サンプルの女性は、首飾りに大量のビーズを用いた特徴的な身体装飾をしている。特に未婚女性は恋人からビーズをもらうため、多い人では9キロものビーズを首につけていた。また、調査対象の女性52名(約12才~84才)の首飾りに用いられていたビーズを入手方法別にみると、その6割以上は、結婚する前に恋人であったモランが購入したものだ。

モランは、自分の恋人である未婚女性にビーズを与えるが、こうすることでふたりの関係は正式なものになる。このビーズの量は大量で、お金にするとヤギ10頭分ほどである。

さらにモランは、ビーズを与えた娘の母や、娘と同一サブ・クランに属する他の娘たちとの間にも新しい社会関係を築く。こうした関係を、正式な結婚によって生まれる社会関係と比較し、本研究では「擬似的な結婚」と位置づけた。

ビーズをもらった娘は、母の家から独立して自分の家を建て、ここでモランを待つ。モランがビーズをあげる相手は、自分のサブ・クラン以外でなければならない。多くの場合には、同一クラン内の娘である。しかし、サンプルではクラン外婚が厳格に守られているため、ビーズをあげた恋人と結婚することはできず、彼らの関係は娘の正式な結婚により終焉を迎える。また、正式な結婚に関して強い決定権をもつ長老は、この「擬似結婚」によって作られる社会関係には一切関与していない。これらのことから、この「擬似結婚」は結婚を許されないモランと女性たちがおこなう「ままごと」的な一時しのぎの関係にすぎないと見ることができる。

しかし、同じ状況をモランの側から見ると、「擬似結婚」はモランにとって、ビーズを利用しながら長老を排除する形で社会の華やかさを独占する装置となっている。

長老の権力に押さえつけられ、社会の周縁に追いやられているかに見えるモランであるが、ビーズという表現媒体に注目すると、モランは、少年や長老とは明らかに異なる派手な身体装飾をして、歌や踊りに明け暮れ、女性にビーズを与えながら自由な恋愛を楽しみ、社会の華やかさを享受しているのである。

#### 5. サブカルチャー化するモランの身体装飾

最後にモランの身体装飾に注目する。町の近くの地域では、モランの就学率は高く、また、長老の許可を待たずに結婚するモランの数もこうした地域で近年急速に増えている。これらのことは、サンプル社会において年齢体系が希薄化しはじめていることを示している。

その一方で、モランが自らを飾るために用いるビーズの量は減少するどころか、時代とともに増加している。プラスチック、アルミ片、造花、銀紙などとビーズを組み合わせて作る新しい装身具も生み出されている。特に町の近くに住む一部のモランの間では、極端にビーズを多用した華やかな装飾が行われている。

このようにモランがより多くのビーズを身につけ派手に装う傾向は、社会変容の中でモランという地位が、いままでのような当たり前さから少しずつずれてきている中で、彼らが「モランである」ことをより強い形で選びとり、その誇りや喜びを身体装飾を通じて意識化していることの表れと見なすことができる。

サンプルのモランにとってビーズを中心とした身体装飾は、「伝統的な身体装飾」から一歩進んで「人目をひく若者文化」、「自己主張のための道具」、言い換えれば、一種のサブカルチャーを表現する媒体となってきたと言えるだろう。

---

### 北部九州A市の鬪鶏に関する人類学的研究 試合と賭けの構造と実践

波佐間逸博  
京都大学人間・環境学研究所

鬪鶏は、古代より世界各地でおこなわれており、日本でも中国文化の伝来とともに開始され、現在まで続いてきた。発表者は、1995年5月から1997年7月にかけて4回、合計約7カ月間、北部九州のA市において鬪鶏に関する調査をおこなった。本発表では、鬪鶏活動に参加している人びとの具体的な行動を、試合の対戦の組織化および試合中の賭博行動に焦点をしばって分析することを通して、その実践を民俗誌的に報告するとともに、ゲームの特質を指摘する。そして鬪鶏に関与している人び

とが、どのように「楽しさ」を生成しているのかを、闘鶏の規則の側面と参与する人びとの相互行為の側面から人類学的に考察する。

北部九州には、A市以外にもいくつかの大会会場（ダイバ）が存在しており、聞き取りによって得られた情報から4県12市にわたって12カ所の大会会場が存在していることが明らかになっている。発表者はそのうち、A市を含め、2県6市でおこなわれている6カ所のダイバを確認した。

一回の闘鶏大会の集まりは、市外、県外からの参加者を含む20~70人の人びとから構成されている。参加者の顔ぶれはトリの飼育者に限定されており、参加者たちは、当日の試合への出場者、もしくは賭けへの参加者という役割のうち、すくなくとも1つの役割を担当していた。

A市の闘鶏試合は、諸外国の闘鶏試合との比較において以下のような特徴的な形式を持つことが明らかとなった。体格差のある2羽のトリを闘わせ、引き分けの場合には、下位のトリを勝ちとするルールがあり、試合時間は平均で61.8分と長い。上位のトリ（ウワドリ）と下位のトリ（シタドリ）はそれぞれ、攻撃と守備を担当するというように、試合における役割が分化している。こうした役割の差異は、距（けづめ）の施術やテープの巻き付け箇所の差異と対応しており、トリの所有者自身の意図的な操作が役割分化の強調、再生産に関与していることが明らかになった。

53試合の結果をみると、シタドリがウワドリを負かすという試合は1試合のみであり、また、ウワドリ27勝にたいしシタドリ26勝と双方のトリの間に勝敗数の偏りはまったく見られない。制限時間は45分から90分間に5分ごとに分布しており、ウワドリが勝利した試合にのみ注目した場合でも、制限時間の平均68.5%の時間が勝利の決定までに費やされています。また、引き分けに終わった試合の出現頻度は制限時間毎の試合数と関連していることから、長い制限時間を設定した試合や、逆に制限時間が短い試合に集中するという傾向はないといえます。すなわち役割の非対称性が付加されたウワドリとシタドリとの勝敗の拮抗関係は制限時間をたくみに設定することを通して達成されているのである。

賭け（ショウブ）には、試合開始前にトリの所有者同士が相談して賭ける「ダイチヨウ」と、試合中に観戦者が中心となって一対一で賭ける「マンジュウ」の2種類がある。ダイチヨウは「どちらのトリが勝つか」を争点とし、レート差がないのに対して、マンジュウではレート差が設定できるし、単に勝敗の行方だけでなく、たとえば「30分以内にはシタドリは鳴かない」といったように、トリの特定の行動が出現するか否かをめぐって、観

戦者が自在に制限時間を設定しつつ、賭けの対象とすることができる。もっとも頻繁に提示されるマンジュウはトリの勝敗予想を対象としており、17試合で363回と全マンジュウ提示回数の74.2パーセントを占めているのだが、レート差は0が最頻値をとり、差が拡大するに従って頻度が減少するという傾向を示す。ウワドリが圧倒的に有利に展開してゆき、シタドリが負けそうになると、レート差が付与される勝敗予想はおこなわれなくなり、正規の設定時間を無視して、自在に設定し直しながら予想を行う「ジカンチヂメ」の賭けが提示されるようになるのだが、注目すべきことに、このカテゴリーの賭けでは、賭金が必ず対等に設定されていたし、レート差が開いた勝敗予想の賭けよりも提示回数は多く、選好されていた。

試合時間中に生ずる賭けの提示は、同調する傾向があり、試合の様相が劇的な変転をみせるとき、一気に活性化する。マンジュウの提示が盛んな試合が理想的であると彼らは認識しており、このような盛り上がりの状態を「ボンがアツイ」と表現し、称揚する。

バリの闘鶏についてクリフォード・ギアツが分析して以来、世界各地でおこなわれている闘鶏が多くの調査者によって報告されるようになった。これらの研究の多くは、ギアツの影響を強く受けているためか、日常的に疎遠なものが賭けの対抗者となり、逆に親しいものとは同調するという、闘鶏への参与者たちの社会関係と賭けの場での競合関係の対応性や、人間とトリとの同一視現象といった文化社会的背景に関心を集中し、解釈学的、象徴人類学的分析を展開してきた。

これまで、闘鶏競技のみならず、動物同士を戦わせる遊技の研究では、動物の持つ攻撃性こそ、人びとを引きつける第一の要素であると指摘されてきた。しかしながら、A市の試合で観察された、トリに工夫を凝らし、試合における非対称的なスペクタクルにトリ主自らが強く関与するということがあったように、闘鶏の面白さは、トリが本来的に持つ属性自体に内在するといった、参与者たちにとっての完全な外部に存在するのではなく、その属性を強調し、あるいは抑制するといった関与のうちに生成されるのである。

試合に出場するトリ主は、勝敗が不明確なダイチヨウに参加し、観戦者たちは、賭けの条件を操作することを通して、予測不可能な構図を構築しながら賭けに参与する。A市において、闘鶏賭博は、結果が不明確になるように賭けを設定し、その成り行きを見守るという人びとの振る舞いを通して達成されている。また、試合時間の中で観戦者たちは、即興的な賭けをおこなうと同時に、戦っているトリの行動に注目しつつ、状況に対する判断についての発話を交換し、自らの観察眼を披露するし、



無様な戦い方をするトリの所有者は擲擧の対象となる。試合の進行にしたがって、複雑で即興的な賭けをおこなうことができるルールのもと、観戦者として、自らを投企しあうという過程によって「楽しさ」を生成しているのである。

## 近接しつづけることとしないこと - マハレ山塊国立公園 M グループのチンパンジー - (*Pan troglodytes schweinfurthii*)

伊藤詞子

日本学術振興会特別研究員,  
京都大学大学院理学研究科人類進化論

チンパンジーは他の多くの霊長類と同様、単位集団と呼ばれる明確な境界をもった社会を形成する (e.g. Nishida, 1968)。伊谷 (1987) は、「集中性」と「閉鎖性」という群れ社会の特質のうち、チンパンジーはこの成員がいつもまとまって行動する「集中性」を欠いている点で他の群れ社会と対照的であると記載している。集中性やその欠如を産み出すのは、近接したかしないか、近接しつづけたかしなかったか、誰としたのか、といったインタラクションによっている。そこで、本研究では1個体を定点として近接のダイナミズムを記述することで、そのメカニズムに迫ることを目的とする。

1997年8月から翌年7月までの約一年間、タンザニア連合共和国マハレ山塊国立公園に生息するMグループチンパンジーの野外調査をおこなった。使用したデータは、97年9-10月(I)と98年3-4月(II)の、一日に4時間以上の個体追跡によるデータのみである。観察時間はIで6日間2127分、IIで5日間1804分、のべ定点個体数はそれぞれ6と5頭である。定点個体を追跡中に他個体(9歳以上のワカモノとオトナの個体のみ)が観察者の視界内に入った場合を近接とし、近接状態から1分以上連続して視界内からいなくなった場合を非近接とする。近接および非近接となった個体の、単位時間あたりののべ頭数を「流動性」の指標とする。

9日間の流動性を日単位で比較したところ、一貫してIにおいて高く(平均30個体/時間、レンジ19~46個体/時間)、IIにおいて低かった(平均3個体/時間、レンジ0~4個体/時間)。Iにおける流動性の高さは、追跡個体が同一個体と何度も繰り返し近接したり離れたりするだけでなく、実にさまざまなメンバーと近接することによって生じている。一方、流動性の低いIIでは、近接するメンバー数そのものが少ない。このことは、ある瞬間に見える個体の数によっては予測しえない。また、Iのパ

タンでは近接相手が増えつづけるため、全体のまとまり(メンバー)は実際に近接しない限り予測不可能である。このメンバー数を観察終了時点まで累積すると、Iでは単位集団のほぼすべての成員をカバーするが(単位集団サイズあたりの総近接相手数は平均83%、レンジ74~97%)、IIでは観察開始時点でのごく限られた成員数を越えることは稀である(平均12%、レンジ3~22%)。チンパンジーの近接の様態は、長時間持続して近接しつづけるものと、その一方で繰り返される非常に短い近接も多い。こうした1分未満の短い近接の頻度を比較すると、Iで圧倒的に多い(I: 平均4.6/時間、II: 平均0.2/時間)。

以上のことから、Iの断続的に繰り返し近接するパターンによって、単位集団の境界を産み出す、ある種の集中性が生じていると推測される。これは、近接を維持し続けることで成立するニホンザル的な集中性とは明確に異なる。一見この近接のあり方は局所的には変化しつづける為に不安定に見えるが、このパターンによって単位集団全体の動きが安定化している。IIのパターンにおいては、限られた小数の相手と一旦起こった近接を互いにできるだけ維持し続けることで、複数の相対的に閉鎖的な小さなまとまりが維持されているものと考えられる。これらの小さなまとまりは局所的に見れば安定しているが、変化しないことによって安定しているがために、小さなまとまり同士が出会えばドラスティックな変化となる。常に大転換を孕んだまとまりであるともいえる。いずれにせよ、IIのパターンからは今のところIのパターンと同様の記述によっては、単位集団の境界生成へと回帰してゆくプロセスを記述し得ない。しかし、常にIのパターンへと戻ってゆくことから、なんらかの了解しうる記述が可能と考えている。

「非集中性」という特徴は、時間を累積することによってしかその社会の枠組みが見えないということにつきる。ほとんどの場合、こうした累積によって一旦抽出された社会単位は、改めて省みられることなく前提とされる。しかし、時間を累積することによってしか見えてこないということは、逆に、チンパンジーにとってその社会は作られつづけてゆくものであり、局所的に現れる近接状態は、社会の境界を生み出すプロセスでありつづけていることを意味する。近接のダイナミズムそのものに関しては、これまで研究がなく、個々の変化そのものはほとんどの場合、平均化されることによって生態学的に適切なグループサイズ(あるいは適切な社会環境)の生成へと向かう際のノイズとして扱われてきた。しかし、近接のダイナミズムの理解、ひいては、このダイナミズムが産み出す非集中性という社会の特質を理解するためには、すべての変化を連鎖的に捉える必要がある。さら

表 1 混群を構成する種

Species			Estimated group size	Main food type
<i>Cercopithecus diana</i>	ダイアナモンキー	d	25-30	fruit, insect
<i>C. campbelli</i>	キャンベルモンキー	c	10-11	fruit, insect
<i>C. petaurista</i>	ショウハナジログエノン	w	18-25	fruit, insect
<i>Colobus verus</i>	オリーブコロブス	v	10	leaf
<i>C. badius</i>	アカコロブス	b	70-75	leaf, fruit
<i>C. polykomos</i>	クロシロコロブス	p	10	leaf, seed, fruit
<i>Cercocebus atys</i>	スーティーマンガベイ	a	50	seed

に、非集中性の持つもう一つの特徴である局所空間における個体数の変動と、食物環境の季節的変動との関連がこれまでの研究によって指摘されている。流動性がこの問題といかに関わっているのかを明らかにしてゆく必要がある。いずれも今後の課題としたい。

参考文献

Nishida, T., 1968. The social group of wild chimpanzees in the Mahali Mountains, *Primates* 9, pp.167-224.  
 伊谷純一郎, 1987. 『霊長類社会の進化』平凡社

オナガザル混群の構成とその変化

足立 薫

京都大学大学院理学研究科人類進化論

混群は異種の群れが、あたかも同一種の群れであるかのように寄り集まって、いっしょに移動し、採食する現象である。霊長類では、複数の種が同所的に生息するアフリカや南米の熱帯地域で、さまざまな構成、頻度、持続時間の混群が形成される。混群という現象は、「複数の種は同一のニッチを占めることができない」という競争的排除の原理に反している。それにもかかわらず「なぜ混群をつくるのか」という問いに答えるために、混群形成の機能をさぐる研究が行われてきた (e.g., Cords, 1987; Peres, 1996)。しかし、多様なコストとベネフィットが複雑に絡み合っているため、混群を進化させた要因となる機能を直接的に証明することは難しい (Chapman and Chapman, 1996)。本報告では、機能をさぐるという混群研究の主流の手法から少し離れて、混群のダイナミクスを捉えるための分析を行った。

西アフリカのタイ国立公園では、7種のオナガザル類が混群を形成する(表1)。本報告ではこのうちダイア

ナモンキーの1グループを focal group として視点の中心に据え、ダイアナモンキーが形成する混群の動態を分析した。混群パターンは、混群率を使って表される場合が多い。混群率は観察時間あたりに focal group がパートナー種のグループと混群を形成した時間で計算する。これは同種群の個体間関係を分析するとき、アソシエーション・インデックスを使うのと同じ考え方で、一定の期間のデータをプールして、混群パターンを恒常的な二者間の「関係」として固定して取り出す方法である。

しかし、混群に登場する7種のグループは、実際にはくっついたり離れたりを繰り返し、混群は変化しつづけていた。ダイアナモンキーの形成する混群では、6種のパートナー・グループが出入りを繰り返し、構成が次々と変化した。パートナー種の構成が変化するたびに新しい構成 (association) として記録すると、観察期間中に53の構成タイプが観察され、このうち頻度の上位10タイプで全構成データの約70%を占めた。上位10タイプの構成は、持続時間や観察される時間帯が異なっていた。構成の変化のしかたを捉えるために、ある構成とその後に続く構成の推移についても分析した。上位10タイプの構成について、それぞれに、その後に観察されやすい構成があった。起こりやすい推移によって、構成タイプを接続するスキームを描くことができた(図1)。構成から構成への推移のかたちを分析することで、ダイアナモンキーの混群のパターンを描くと、一定の傾向をもちながらも、つねに変化しつづけるという混群のイメージが浮かび上がってくる。

「変化しつづける」という特性は、混群という社会とどのように関係しているのだろうか。混群では異種の個体どうしは、目立った社会的交渉がほとんどなく、ごくまれに起こる攻撃的交渉においても、種間で勝敗がはっきりとは決まっていなかった。また鳥の混群のような leader と follower のような役割分化も、あいまいな形でしか存在しなかった。あるときは混群の移動を先導するような位置にいる種が、別のときには追従する行動をと

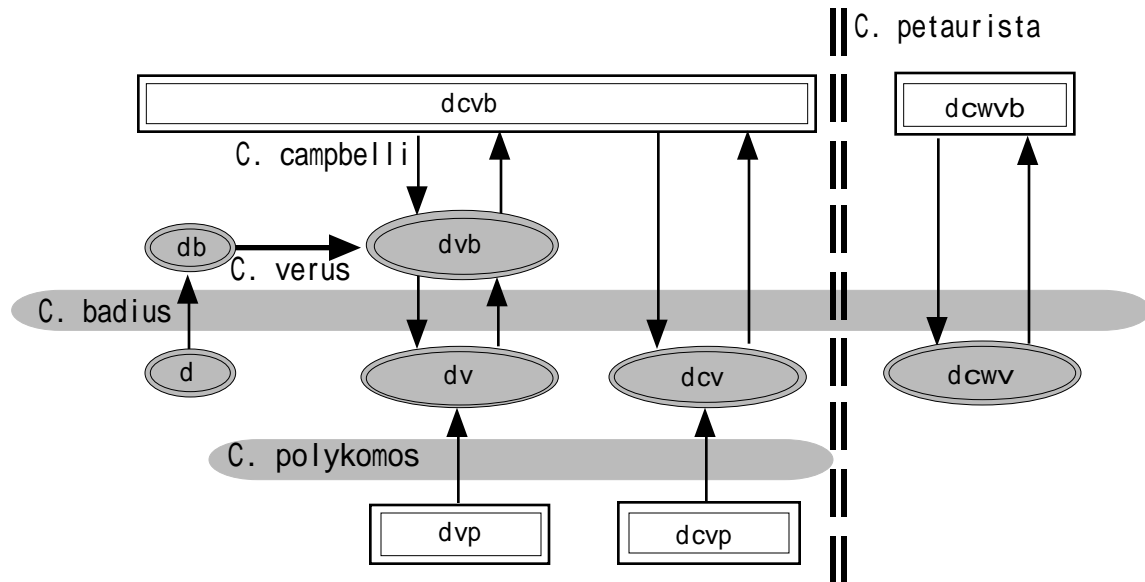


図1. ダイアナモンキーの混群パターン

ることがある。そもそも先導/追隨の構造がはっきりと分かるような場面はめったに起こらず、混群を構成する種の個体が、それぞれ入り乱れて、文字どおり混ざり合って移動していくのである。

このように同じ群れにいる異種の個体間で、目立った社会交渉が少なく、交渉があっても結末がはっきりしないために、観察者は異種の個体間の関係が「あいまい」という印象を受ける。たとえばニホンザルの社会構造を明らかにしようとするとき、攻撃的交渉を繰り返し観察して、個体間の優劣を区別し、さらに順位序列を抽出して固定した「関係」を分析する。ところが、混群では、異種の個体どうしを区別するような基準はあらかじめ存在せず、安定した「関係」を使ってその社会構造を表すことができない。ニホンザルの個体の優劣による順位序列のような区別の体系を、混群に想定することはできないのである。

「変わりつづける」という混群のイメージは、この区別の体系の不在という社会の側面と、深いつながりがあると考えられる。入れ替わりを繰り返し、メンバー構成をつねに変化させ、群れの輪郭を固定しないことは、強い/弱いとか同じ/違うといった区別を逃れるのに適したあり方である。「変わりつづける」ことは、区別という媒介を通して、「あいまい」な異種の個体間の関係と深く結びついているのではないだろうか。変化しつづけながら、「あいまい」な関係でお互いに関わり合うという混群の社会のあり方は、同種群の社会とのもっとも大きな違いである。混群の機能は、異種の個体間の区別による「関係」を抽出して、コストとベネフィットのバランスシートを作成することにより明らかにされる。変わ

りつづける「あいまいな」社会という側面から混群を理解し、この側面がバランスシートに及ぼす影響を考察することは、混群の機能を特定するうえでも重要だと考えられる。

#### 参考文献

- Cords, M., 1987. Mixed-species association of *Cercopithecus* monkeys in the Kakamega Forest, Kenya., *University of California Publications in Zoology*, Volume 117
- Peres, C. A., 1996. Food patch structure and plant resource partitioning in interspecific associations of Amazonian tamarins., *Int. J. Primatol.*, 17: 695-723
- Chapman, C. A. & Chapman, L. J., 1996. Mixed-species primate groups in the Kibale Forest: ecological constraints on association., *Int. J. Primatol.*, 17: 31-50

#### バカ・ピグミーの「ベ」集会の時間構成の比較・踊り形式の違いが、時間構成に与える影響

都留泰作

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

アフリカ、カメルーンの狩猟採集民バカ・ピグミーの祝祭的集会「ベ (be)」における踊りと歌の相互作用の過程を、行動学的データを用いて分析する。ピグミーの音楽は、独特のポリフォニーで知られ、民族音楽学者に

よる詳細な分析が加えられてきた。しかし、彼らの音楽の社会的意義に光が当てられることはなかった。音楽の社会的意義を考えた場合、踊りと結びつきは重要で、アロム (Arom, 1985) から民族音楽学者にも注目されている。例えば、彼らにとっての音楽とは「踊りを引き起こすような音の連なり」として定義できるとするアロムの記述にも見て取れるように、このような文化では、人々は踊るという行動によって音楽を経験するといえる。踊りと音楽との関係を問うことは、音楽の社会的な意義を考察する上でも本質的な視点である。以上のような観点から、本論では、「ベ」における観察データから、踊りと音楽の相互関連を明らかにした。

「ベ」では、踊り手=男性、歌い手=女性という役割分担が明確である。そこで、「ベ」を、踊りと歌が対立しつつ組み合わせられた行動と見なし、踊り手の行動と歌い手の行う合唱との関連・相互影響を検討した。踊りは、歌なしには行われないのが一般的なので、「ベ」の時間構成は、歌を中心として記述できる。個々の「ベ」事例は、数分程度の合唱の持続 (セッション) が繰り返されることで成立しており、この繰り返しのまとまりをエピソードと見なすことができる。

また、「ベ」は、種類によって、踊りの様式に差異があり、それに応じて、踊りと歌との関連のあり方も異なる。主として、「ベ」は、扮装した精霊の演じ手が踊る「メ (me) の「ベ」」、腰みのを着けた踊り手が踊る「腰みのの「ベ」」、および、特有のルールに則って歌い手と踊り手が次々に交替してゆく「輪ならび遊びの「ベ」」に分けることができる。

まず、個々のセッションが進行するにつれて、踊り手の行動の頻度がどのように変化するかを調べた。一般に踊り手の踊りや、移動などの行動は、合唱が持続している間に盛んになる。また、エピソードが進行するにつれて踊りも盛んになる。踊りは、歌によって刺激され、促進されるといえる。

さらに、セッションごとの合唱の持続時間を検討すると、踊りの伴う場合の方が平均値が大きいことが分かり、踊りが歌に加わることによって、歌が促進されることが示唆される。このことは、踊りは歌に刺激されるだけでなく、逆に歌を刺激し、促進する側面も持っていることを示している。踊りと歌とは、相乗的に互いを促進しあう関係にあるといえる。また、歌い手の精神的な高揚を表出する行動ナスエ (na sue) が見られるセッションでは、そうでないセッションに比して、踊りが伴うものの割合が大きい。このことは、踊りと歌の相乗効果によって、参加者の精神的な高揚が喚起されることを示している。

また、踊り手が、自発的に行動を起こす場面もしばし

ば見られる。このような行動は、特に「メ」の「ベ」で頻繁に観察される。例えば、合唱の開始や終了などの転回点に先だて、踊り手が何らかの動きを起こし、歌い手の合唱開始や終了を指示しようと試みる場合がある。合唱開始は、「メ」の登場や移動によって、合唱終了は「メ」の停止や退場によって指示される場合が多い。このことを受けて、合唱開始直前には移動の頻度が、合唱終了直前には停止の頻度が高くなっているのが認められる。また、踊り手が、行動の組み合わせを変えたりして演技を工夫し、歌い手を鼓舞することも重要である。例えば、移動の動きと踊りの動作を多彩に組み合わせ、演技に表情の変化を加え、歌い手の関心を持続的に引きつけようとするのが見られる。さらに、「メ」の「ベ」リンボ (limbo) では、二体の「メ」が登場するが、これらの間の行動の同調を徐々に増やす演出が施される場合もある。

このように、踊り手は、演技の工夫を通じて、歌い手に指示・鼓舞を与え、歌の進行過程を左右しようとしていると見ることができよう。ただし、このような試みは、「メ」の「ベ」では盛んであるが、他の二種類の「ベ」ではあまり盛んではない。これらの「ベ」の間で、踊りが伴うセッションの合唱の持続時間を比較すると、「メ」の「ベ」では、他の二種類の「ベ」に比して平均値が大きい。このことは、踊り手が演技に工夫を加えることによって、踊りの歌に対する促進効果が高められていることを示唆している。さらに、「メ」の「ベ」では、エピソードが進行するにつれて合唱の持続時間が長くなるパターンが顕著となっている。これに対して、踊りの演出があまり認められない「輪ならび遊び」では、そのようなパターンは認められず、エピソード進行につれて合唱の持続時間はランダムに推移するのみである。このことは、「メ」の「ベ」では、踊り手の演技や演出によって「ベ」全体の進行過程が方向付けられ、その時間構成の形成に対する踊りの寄与が大きくなっていることを示唆している。

「ベ」では、踊りと歌は相互作用を通じて互いに促進しあう関係にある。このような踊りと歌の相互作用と相乗的な効果は、「ベ」への参加者たちの情緒的な高揚感を喚起し、楽しみの感覚を生み出す重要な要因となっている。今後の研究では、楽譜として記述できるような音楽の構造に、踊りがどのような寄与をしているかを詳しく検討することも必要になるとと思われる。

また、特に、「メ」の「ベ」では、踊り手は、踊りと歌の相補的關係を意識的に利用して、演技を工夫し、踊りの歌に対する促進効果を強め、参加者の楽しみをより深めようとしていると見る事ができる。このことは、

「メ」の「ベ」を宗教儀礼として見た場合、これまでの儀礼研究において重視されてきた象徴体系としての分析に加え、参加者の情緒的反応を喚起する演出効果の側面からの分析も必要であることを示している。

#### 参考文献

Arom, Simha. 1985. African polyphony and polyrhythm, Musical structure and methodology. Cambridge university press

## カメルーン狩猟採集民バカの栄養適応

山内 太郎

オーストラリア国立大学太平洋・アジア高等研究院

### 1. 緒言

アフリカ熱帯雨林に居住するピグミーは体格が非常に小さいことから、古くから人類学者の関心を集めてきた。ピグミーの体格の小ささについては、遺伝的要因に加えて、体温調節、少ない食糧に対する適応、森の中を移動するためにエネルギーコストを減少させる適応などエネルギー代謝・効率に関する仮説が提示されている<sup>1)</sup>。ところがピグミーを対象とした詳細な栄養学研究は限られている。特に、上記の仮説を検証するために不可欠である、エネルギー消費量の測定についてはほとんど行われていない。

### 2. 対象と方法・目的

カメルーン共和国東州、ブンバ・ンゴコ地区のドンゴ(Ndongo)村周辺に居住するピグミー系狩猟採集民バカの成人男女を対象として、3つのvillage campのほぼ全数(男性75名、女性73名)の生体計測を行った。さらに2組の夫婦(20代、40代)を対象として、連続3日間の24時間心拍数モニタリングを行い、同時に活動追跡調査、食物秤量調査を行った(計12人日)。本論は以下の3点を目的とする。生体計測値からバカの成人の栄養状態を同定し、慢性的栄養不足が見られるかどうかを調べる。2組の夫婦を対象とした詳細な追跡調査から雨季・village camp居住における1日の時間利用、栄養素(エネルギー、タンパク質、脂質)摂取量、エネルギー消費量を同定する。さらに生体計測値、各種栄養素摂取量、エネルギー消費量/身体活動量についてアフリカピグミーの先行研究と比較することによって、雨季のvillage camp居住におけるバカの栄養適応について考察する。

### 3. 結果と考察

成人の平均身長は、先行研究のアフリカピグミーの中では男女ともに中程度であった。平均BMI(体格指標: 体重/身長<sup>2</sup>, kg/m<sup>2</sup>)は男女ともに21であった。男女ともに80%以上の対象者が18.5 < BMI < 25.0という標準的な栄養状態の範囲内であった。

2組の夫婦についての連続3日間の個人追跡調査の結果および先行研究との比較からは、雨季、village camp居住におけるバカピグミーの1日のエネルギー摂取量(7.0 MJ/日)およびエネルギー消費量(7.7 MJ/日)は低いことが示された。エネルギー出納(摂取量 - 消費量)は負であったが、差は10%以内に収まり両者はバランスしていた。タンパク質摂取量も1日平均48gと他のピグミーの先行研究と比較すると少ないもののカメルーンの農耕民、漁労民の中には同レベルのエネルギーおよびタンパク質摂取量が報告されている集団もあった。さらに対象者のタンパク質摂取量はWHOの安全レベル<sup>2)</sup>を満たしていた。

### 4. 結論

カメルーン南東部に居住する狩猟採集民バカの成人は他のアフリカピグミーの集団と比べて中程度の身長であり、栄養不足ではなく、標準的な栄養状態を維持していた。またサンプルサイズ、調査期間は限られるものの、雨季のvillage campにおいては利用可能な食物が少ないためにエネルギー摂取量は少なく、またそれとバランスさせるべくエネルギー消費量を抑えるといった行動適応が起こっていた可能性が示唆された。

狩猟採集民バカの栄養適応を評価するためには、季節性(雨季・乾季)、居住地(village camp, forest camp)を考慮した長期間の研究が必要である。またピグミーの体格の小ささについての仮説を検証するために、ピグミーの基礎代謝量、各種活動のエネルギーコストそして1日総エネルギー消費量の測定が急務である。

#### 参考文献

1) Shea BT and Bailey RC (1996) Allometry and adaptation of body proportions and stature in African pygmies. *American Journal of Physical Anthropology* 100:311-340.

2) FAO/WHO/UNU Expert Consultation (1985) *Energy and protein requirements*. Technical Report Series 724.

—Geneva: World Health Organization.

(以上は、第5回生態人類学会研究大会の報告である。報告は、発表要旨[和文]に発表者が一部修正を加えたものを掲載した。掲載順は発表順に従った。なお、所属は発表当時のものである。)

## 学会通信

1998年3月22-23日に開催された第3回学術大会、ならびに1999年3月21-22日に開催された第4回学術大会の総会で話し合われた事項について、これまで報告がありませんでしたので、ここに報告します。

### 第3回生態人類学会議事録より抜粋

#### 1. 学会長の選出

第2代学会長に大塚柳太郎（東京大学）が就任することを決定した。任期は2000年3月の大会までとする。

#### 2. 1998年度理事の選出

任期：2000年3月の大会まで

大塚柳太郎（東京大）、松井健（東京大）、掛谷誠（京都大）、西田利貞（京都大）、丹野正（弘前大）、佐藤俊（筑波大）、武田淳（佐賀大）、口蔵幸雄（岐阜大）、寺嶋秀明（神戸学院大）、佐藤弘明（浜松医科大）

#### 3. 第4回学術大会の開催地について

第4回学術大会は富山大学人文学部（竹内潔会員）が当番校となり開催する。

### 第4回生態人類学会議事録より抜粋

#### 1. 第5回学術大会の開催地について

第5回学術大会は山口県立大学国際文化学部（安溪遊地会員）が当番校となり開催する。

### 第5回生態人類学会議事録

日時：2000年3月19日（19:00-19:30）

場所：山口市湯田温泉かめ福

出席者：90名

#### 議題（報告・審議事項）

##### 1. 学会長の選出

第3代学会長に掛谷誠（京都大学）が就任することを決定した。任期は2002年3月の大会までとする。

##### 2. 事業会計報告

1998年度会計報告についてはニュースレター No. 5 で報告済みであり、1999年度の会計報告はニュースレター No. 6 でおこなう（下記参照）。

##### 3. 第6回学術大会の開催地について

第6回学術大会は弘前大学人文学部（丹野正会員）が当番校となり開催する。

##### 4. 理事の選出について

理事については、掛谷学会長と第5回学術大会を開催した山口事務局、および第6回学術大会を開催する弘前事務局で話し合い、適任者に依頼することを決定した。任期は2002年3月の大会までとする。

## 会計報告

### 1999年度決算報告（生態人類学会山口事務局 北西功一）

#### 1999年度 生態人類学会学会費決算

収入項目		支出項目	
1998年度学会費（@2000×9）	18,000	ニュースレター印刷費、送料	71,494
1999年度学会費（@2000×112）	224,000	大会要旨集印刷費	3,150
2000年度学会費（@2000×72）	144,000	消耗品（セル名札、領収書）	1,920
2001年度学会費（@2000×1）	2,000	雑費（口座開設料）	350
		第5回大会運営費補助	86,720
計	388,000	計	163,634
		2000年度への繰り越し	224,366

#### 第5回生態人類学会研究大会決算

収入項目		支出項目	
宿泊費徴収	1,332,000	ホテル宿泊、飲食費	1,334,655
雑収入	3,000	アルバイト代	53,200
運営費補助（学会費から）	86,720	二次会費	33,865
計	1,421,720	計	1,421,720

## Information

### 学会費を集めています

2000年度の学会費を集めています。2000年3月におこなわれた山口での学会に参加された方はすでに支払い済みですが、それ以外の方は同封の郵便振替を利用して学会費を振り込んでください(口座番号 02240-8-55861、加入者名 生態人類学会弘前事務局)。今後のニュースレターの発行や学会の準備などに支障がでる可能性があります。よろしくお願いします。

### 住所変更をされた方

住所、所属、電話番号、E-mail アドレスなどに変更があった方は速やかに学会事務局までご連絡ください。

### アイデア募集

弘前事務局では、2001年に開催される第6回生態人類学会研究大会の企画を募集しています。第5回研究大会で

「コメント」が企画されましたが、その良かった点、悪かった点を勘案しながら、「生態人類学の可能性」「生態人類学が挑戦すべき課題は何か」などのテーマについて議論できる場を設けたいと考えています。皆さんのご意見・アイデアをお寄せください。

### 生態人類学会ホームページ

常設の事務局がなくなったことに伴い、生態人類学会のホームページもURLを失ってしまいました。とりあえず、弘前大学のサーバに生態人類学会の暫定的なホームページを作り、そこに第5回生態人類学会研究大会の報告を載せることにしました。またこのホームページには、第6回生態人類学会研究大会の情報も順次載せていく予定です。URLは以下のとおりです。

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/EcoAnthro/index.html>

## 編集後記

第6回生態人類学会研究大会は、本州の西端、山口県から北端の青森県へと大きく場所を移して開催されることになりました。弘前事務局では、現在、会場の下見と称して週末に温泉巡りを楽しんでいます。津軽にはすばらしい秘湯・名湯がたくさんあるのですが、そういう温泉に限って交通の便が悪く、会場選びに頭を悩ませています。(曾)

先日、下見のため、とある海沿いの温泉をおとずれました。夜、寒風のなか温泉街に繰り出し、連休の前日というのに、ひとつこひとり街にはおらず、スナックは開いていましたが、人がいない・・・公衆浴場で暖まろうとさらに歩くと、そこは閉鎖、代わりのおふるは・・・とたどりつくと8時半までで閉まっている。街を3周り半して風邪をひきました。津軽の楽しさは、利便性ではありません。それをみなさまに体験していただけたらと思います。お待ち申し上げております。(作)

生態人類学会ニュースレター No.6

2000年6月1日発行

編集：作道信介、曾我亨

2000年度事務局

〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地

弘前大学人文学部内 生態人類学会弘前事務局

Tel. (0172) 39-3208 (曾我) / Fax. (0172) 32-5340 (人文学部)

E-mail: [sogap@cc.hirosaki-u.ac.jp](mailto:sogap@cc.hirosaki-u.ac.jp)

印刷：笹軽印刷

〒036-8356 弘前市下白銀町11